

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02015

研究課題名(和文) 紀要を見直す 被引用分析を通じた紀要の重要性の実証と紀要発展のための具体的提言

研究課題名(英文) Reconsideration of Bulletin Journals by Citation Analysis: Demonstration of Significance and Concrete Suggestions for Development

研究代表者

設楽 成実(Shitara, Narumi)

京都大学・東南アジア地域研究研究所・助教

研究者番号：00727943

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本科研では大学や研究機関により刊行される学術誌を広く紀要と位置付け、その学術的貢献を実証し、継続・発展に向けた議論を促進することを目的に、1)国内の東南アジア研究誌7誌を対象とした被引用文献の分析(雑誌論文のみ30年分)、2)紀要編集者を対象としたアンケート及び聞き取り調査を実施した。1)では引用された国内誌の内訳が「大学紀要」45%、「研究所紀要」23.1%、「学会誌」27.3%となり紀要の学術的貢献が実証された。2)では紀要の8割弱が問題を抱えていること、求める外部支援としては「査読者の紹介やネットワークの構築」「雑誌の広報」が多く、また査読制度の導入や強化に関心が高いことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、国内の学術研究の発展において大学や研究機関の刊行する学術誌が果たしてきた役割を数値をもって実証した。学術雑誌の引用分析は、近年WOSやScopusといった海外の大手データベースを基に行われることが多く、国内の学術雑誌の被引用状況に関する調査は分析可能なデータが不足し進んでいなかった。本研究では、引用データも作成することでこうした停滞気味であった国内の学術雑誌の被引用状況を明らかにした点に学術的意義がある。また、本研究は、大学や研究機関のもつ出版力を再認識する機会となり、我が国の今後の研究基盤の整備を考える際に利用可能な基礎データを提供したという点で社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research project is to demonstrate the academic contribution of the journals published by universities and research institutes, namely "kiyo" and to promote discussion on their continuity and development. To this end we conducted our study in two phases. First, we analyzed journal articles cited in 7 Japanese core journals on Southeast Asian Studies from 1987 to 2016. Second, we conducted a questionnaire and interview survey targeting "kiyo" editors.

The results of the first survey showed that among cited journal articles 45% were "university bulletins," 23% were "research institute bulletins," and 27% were "academic society journals." This data showed the academic contribution of "kiyo." The results of the second survey showed that almost 80% of the bulletins had problems. Among external support which "kiyo" editors required are included "a system or networking to possible reviewers" and "advertisements of "kiyo".

研究分野：図書館情報学

キーワード：学術コミュニケーション 学術出版 紀要

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初、日本ではシリアルズ・クライシスが社会的問題となり、日本発の学術雑誌の基盤体制の整備、発信の強化を目指した議論が展開されていた。しかし、学術誌を巡る議論は学協会による学術誌、つまり学会誌を中心としたものになっており、大学や研究所により刊行される学術誌、いわゆる紀要の継続・発展に向けた議論は学会誌に比べ少ないように感じられた。(本研究では、学会誌との比較により研究を進めるべく、大学や研究所により刊行される学術誌を広く「紀要」と定義する。)

その背景の一つに、紀要の学術的貢献に関する理解の不足があるのではないかと申請者らは考えた。実際、紀要の調査は大学紀要の刊行数や電子化の進捗状況などに関しては蓄積があるものの、質に関しては糸賀・関(1986)以降調査が進んでいなかった。こうした紀要の質に関する研究が進まない要因には、分析に必要な国内のジャーナルの引用データの簡便かつ包括的な取得が難しい実態があった。

2. 研究の目的

本研究では、紀要の学術的貢献を実証し、その継続・発展に向けた議論を促すことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、以下のように2段階で調査を進めた。

調査1) 紀要の被引用状況、および学会誌の被引用状況との比較による紀要の特性の検討

まず、紀要の学術的貢献を再検討するために、東南アジア研究の国内主要学術雑誌7誌をサンプルとして独自に引用分析を行い、紀要の被引用状況を把握し、学会誌の被引用状況との比較をもとに紀要の特性について検討した。

この調査により紀要の学術的貢献を実証したうえで、調査2を実施した。

調査2) 紀要の編集・刊行現場の現状と課題の検討

調査1で分析対象とした国内主要学術雑誌7誌で引用されていた紀要の編集者を対象にアンケートおよびインタビュー調査を実施し、紀要の編集・刊行現場の現状と課題について調査を行った。回答率は35.6パーセントとなり、97誌から回答を得た。インタビューは、アンケートを受けていただいた編集者のうち、11名(10誌)を対象に行った。

4. 研究成果

調査1) 紀要の被引用状況、および学会誌の被引用状況との比較による紀要の特性の検討

引用総数

734本の論文(日本語論文669本、英語論文65本)から、合計5,503件の被引用文献(雑誌論文のみ)を抽出した。うち、日本を出版国とする2,605件の雑誌種別の内訳は、「大学紀要」(45%)、「研究所紀要」(23.1%)、「学会誌」(27.3%)となり、「大学紀要」および「研究所紀要」からの引用の合計は、「学会誌」からの引用の約2.5倍となった。大学紀要は学会誌より刊行数自体が多い点を考慮に入れた緻密な分析が必要ではあるが、東南アジア研究において大学紀要が学会誌を上回る割合で参照元として利用されてきており、紀要の学術的貢献を実証する結果となった。

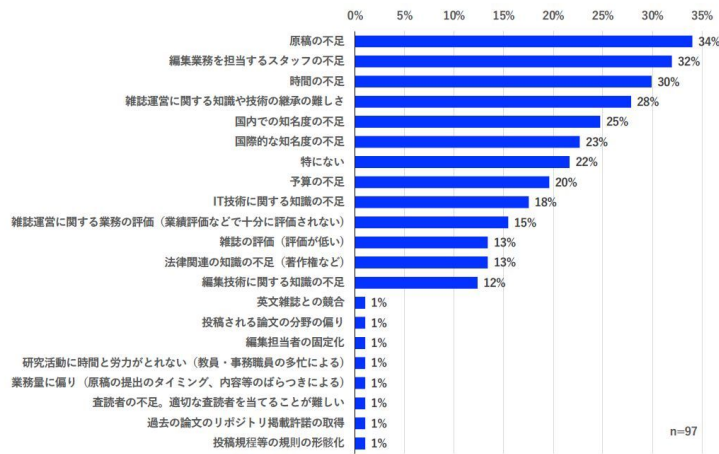
ただし、10年ごとの推移をみると、いずれの時期においても紀要からの引用総数は学会誌からの引用総数を上回っているものの、分野別の推移をみると、社会科学分野、人文学分野ともに「学会誌」からの引用数が増加傾向にある一方で、前者では「大学紀要」からの引用数が、後者では「研究所紀要」からの引用数が減少傾向にある。この傾向が今後も続くようであれば、紀要の存在感の低下を示唆するとも考えられ留意が必要である。

自著引用の割合

自著引用の割合は「大学紀要」(39.5%)、「研究所紀要」(32.3%)、「学会誌」(28.6%)の順に高い結果となった。これより、5-10パーセント程度の差であるが、相対的評価としては「学会誌」が「大学紀要」を上回る一方、継続発表の場としての機能は「大学紀要」や「研究所紀要」が「学会誌」を上回ってきたと言える。

調査2) 紀要の編集・刊行現場の現状と課題の検討

問題



回答した紀要の 8 割弱が何らかの問題を抱えており、その多くが複数の問題を抱えていることが明らかになった。問題は「原稿の不足」が最も多く（34%）、「編集スタッフの不足」（32%）、「時間の不足」（31%）、「雑誌運営の知識や技術の継承の難しさ」（28%）と業務体制に関する問題が続き、そのあとに「国内での雑誌の知名度の低さ」（25%）、「国外での雑誌の知名度の低さ」（23%）といった雑誌の評価に関する問題が続いた。「原稿の不足」は、倉田・上田（2013）の調査時から変わらず紀要にとって最大

の問題であり続けている。一方、「予算の不足」は、倉田・上田（2013）の調査時には「原稿の不足」に次ぐ大きな問題であったが、今回の調査ではそれ以外の問題が上位に入った。紀要の電子版の出版が進み印刷費・発送費などが削減されたことで、問題の緩和につながっていると考えられる。

問題への対応

問題を抱える紀要の 4 割強が、問題への対応を行っている、もしくは今後実施予定であるとの結果になった。紀要ごとに刊行の目的や発行形態に合わせた対応を行っており、対応策は多岐にわたるが、なかには「規模の縮小」という消極的な対策も含まれる点には留意が必要である。具体的な対策が挙げられなかった問題に、「雑誌運営に関する業務の評価（業績評価などで十分に評価されない）」が含まれた。

外部に求める支援

外部に求める支援について尋ねたところ、一番多い回答は「特がない」で約 4 割を占めた。外部に求める支援としては、「査読者の紹介やネットワークの構築」（19%）、「雑誌の広報」（18%）が多く、「既刊号の電子化作業の代行」「雑誌運営に役立つ情報をまとめたウェブサイトの作成」「編集者のスキルアップのためのセミナーの開催」「編集・印刷費用の援助」と続く。紀要編集者の間でも関心の高かった査読制度の導入や強化は、紀要の質の向上に向けた取り組みとして挙げている紀要もあり、紀要編集者の間では関心が高いことが窺える。先に述べたように、問題を抱えている紀要が約 8 割に上るのに対し、外部からの支援を求める紀要は 6 割にとどまった。紀要編集者の中に紀要に関する問題は編集委員会内で解決すべきという考えがあることが窺え、外部からの支援を検討する際にはこの点に留意しながら進める必要があると考える。

以上の調査結果をまとめ、以下のような提言の取りまとめを行った。

「原稿の不足」という問題は、2013 年に行われた倉田・上田の調査でも最大の問題であり状況の改善がみられず喫緊の課題となっている。「雑誌の知名度」「雑誌の評価」とも絡む問題であり、これらの対策と合わせて考える必要がある。査読制度の導入や強化は、こうした問題の対策の一つとも考えられるが、萌芽的研究や試論も含む幅広い研究の掲載という、紀要の積極的意義を減じる可能性もあり慎重な議論が必要である。

「編集スタッフの不足」「（編集委員の）時間の不足」といった編集を支えるマンパワーの不足に関する問題については、編集業務の外注や印刷業者との連携が対策の一つと考えられる。コロナ禍により業務のオンライン化は紀要の編集現場でも進んでいることが今回の調査で明らかになった。セキュリティの整ったサーバーや電子投稿システムの提供など、業務のオンライン化の支援も対策の一つと考えられる。

現在、プロジェクト外の関係者に意見を聞きながら紀要の継続・発展に向け実効力のある提言の作成に向けた検討を続けている。また、調査 1 で作成した引用データ（日本語および英語文献）は、プロジェクト外の研究者の協力を得て、オープンサイテーション化を進めている。

引用文献

糸賀雅児；関秀行．1986．「論文の発表からみた大学紀要経済学と教育学を中心に」『Library and Information Science』24: 123-132.
 倉田敬子；上田修一．2013．「日本における学術雑誌電子化の状況と阻害要因——学会誌と大学紀要を対象とした郵送調査」『2013 年度日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集』pp.73-76．発表資料 https://jslis.jp/wp-content/uploads/2017/08/2013SpringGP_KURATA.pdf）も参照。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kitamura Yumi	4. 巻 0
2. 論文標題 Parallel Development: Southeast Asian Studies and Library Collections.)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 States and societies in motion : essays in honour of Takashi Shiraishi, edited by Khoo, Boo Teik and Jafar Suryomenggoloの一章	6. 最初と最後の頁 120-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 設楽成実; 天野絵里子; 神谷俊郎	4. 巻 69
2. 論文標題 紀要の電子ジャーナル出版における連携を目指して 紀要編集者ネットワークの挑戦と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 情報の科学と技術	6. 最初と最後の頁 510-515
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18919/jkg.69.11_510	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 設楽成実	4. 巻 2018年
2. 論文標題 紀要の投稿規定の公開状況に関する調査	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 第66回日本図書館情報学会研究大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 77-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤 翔, 設楽 成実, 矢野 正隆, 北村 由美,	4. 巻 32
2. 論文標題 『東南アジア 歴史と文化』誌掲載論文の引用文献の傾向と著者所属機関における所蔵状況	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 情報知識学会誌	6. 最初と最後の頁 73-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2964/jsik_2022_005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 設楽成実
2. 発表標題 今、紀要に追い風が吹いている
3. 学会等名 研究・イノベーション学 会第35回年次学術大会 実行委員企画セッション「紀要の魅力と大学の役割」(オンライン)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shitara Narumi
2. 発表標題 Opening Citation Data: What can/should editors of small-scale journals do?
3. 学会等名 AAS in Asia (Kobe) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shitara Narumi
2. 発表標題 Scholarly Publishing in Japan: Current Status and Issues Based on a Quantitative Citation Analysis of Southeast Asia: History and Culture
3. 学会等名 SEASIA2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 設楽成実
2. 発表標題 紀要の投稿規定の公開状況に関する調査
3. 学会等名 第66回日本図書館情報学会研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 設楽成実
2. 発表標題 地域研究分野における学術雑誌のデジタル化とオープン化の現在
3. 学会等名 第4回 SPARC Japanセミナー 「人文社会系分野におけるオープンサイエンス ~その課題解決に向けて~」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 亀田堯宙
2. 発表標題 地域研究論文からのエンティティ抽出とLinked Data化されたデータの活用
3. 学会等名 第47回セマンティックウェブとオントロジー研究会, SIG-SWO-047-15, 人工知能学会(2019)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kitamura Yumi
2. 発表標題 Analysis of Citation and Library Collection on Southeast Asian Studies
3. 学会等名 Association for Asian Studies Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shitara Narumi
2. 発表標題 Japan's Southeast Asian Studies and the Incorporation of Regional Scholarship: A Citation Analysis of Four Journals for Southeast Asian Studies Published in Japan during 1987-2016
3. 学会等名 ICAS 12 (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本科研に連動して紀要編集者ネットワークという活動を行っている。これまでの活動記録は下記より参照されたい。
<https://kiyo.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	北村 由美 (Kitamura Yumi) (70335214)	京都大学・附属図書館・准教授 (14301)	
研究 分 担 者	亀田 堯宙 (Kameda Arihiro) (10751993)	京都大学・国立歴史民俗博物館・助教 (62501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------